

嫌いなこの子

東京都立南多摩中等教育学校 2年 佐々木 由宇

「始業式なのに部活つてやばくない？」

私は、不満をあらわにしながら弁当を取り出す。ほんとだよなー、と相槌を打ちながらあかりちゃんも机の横にかかっている小さな巾着袋を手取る。教室にはバッグを背負って今から帰る男子たちが「部活頑張ってくださいー」「マジ腹減った」などと騒いでる。あかりちゃんのほうを見ると、すでに二段弁当を分離させていて、下の段の白米に卵味のふりかけをかけている。ニキビひとつない整った顔立ちに、私は思わず見惚れてしまう。肩まで届く髪はとてもサラサラで、天使の輪が浮かんでいる。

いただきます、と言って袋を開けると、こぶしよりも少し小ぶりなおにぎりが三つと、文庫本くらいの大きさのタッパが入っていた。タッパの中から一つ、卵焼きを取り出して口に放り込む。味付けが薄くて少し冷めている感じが、弁当らしくて好きだ。

何気なく窓の方に目を向けると、真つ黒な影が視界に映った。榎田佳澄。細い四肢を、制服で隠しているように見える。目が悪いのか、目を細めながら本を読んでいる。まだ残っているということは部活に入っていたのか。それにしても髪が長いな、うつとうしくないだろうか。

「ねえ、二人で一緒に食べない？」

思い切つて榎田に話しかける。いいけど、と返事をして、机の向きを変えた。

「佳澄ちゃんって何部なの？」

「陸上部」

え、意外、と声を漏らす。ならきつと長距離だ、と言うと、小さく頷いた。たまに校内走ってるよね、とあかりちゃんが私の耳に届くギリギリの声で言う。

「陸上部の顧問つき、佐藤でしょ。なんか細かいところで怒つてきそう」

「そんな怒らないけどね。優しいよ」

「女子には怒れないんじゃない？」

そうなのかなあと榎田が首を傾げる。あかりちゃんはしゃべらない。うつむいたまま弁当を食べている。

ダダン、と床を弾いてあかりちゃんが跳ぶ。腕は翼のように大きく、無駄がない。打たれたボールは、コートギリギリにたたきつけられた。ナイースと先輩の声が聞こえる。

あかりちゃんのスパイクをじつと見つめていると、声をかけられた。

「腕、まだ高いよ。いつも焦つてちゃんとした姿勢でできていない。もっと余裕をもってトス上げて」

私のトスにアドバイスしてくれる。思わず、手に力が入っているのが分かる。

女子バレーボール部には、三年生が四人、二年生が九人いる。今年の夏には先輩たちは引退して、一年生が入ってくる。そのことを考えると、なぜか、漠然とした不安が押し寄せてくる。

「春子、片付け手伝ってー」

先輩が私を呼んだ。みんな、ネットを片付けたり、モップをかけたたりしている。ごめんなさーいと言いなから、私もボールをバッグにしまう。

片付けの後、ミーティングがあった。そこで、新人戦のプリントが配られた。あかりちゃんは、Aチーム。私は、Bチーム。

あかりちゃんと一緒に校舎から出ると、校門の前で、榎田の姿を見つけた。

「一緒に帰ろう」

私が声をかけ、歩き始める。周りを見ると、田んぼが一面に広がっている。田舎だなと思う。

「ていうか明日から通常授業じゃん。まだ課題終わってないんですけど」

三人だと共通の話題がなくて、話が続かない。無理やり大きい声で話す。二人とも反応してくれない。

結局無言のまま歩いていたら、分かれ道で榎田が「私ごちだから」と行ってしまった。

それにしても、今日はやけにあかりちゃんが無口だ。何かあったのだろうか。

「どうかしたの？」

あかりちゃんの目を直接見ないようにしながら聞く。

「榎田さん、多分春子のこと嫌いだよ」

思ってもいなかった返答だったため、反応が遅れた。「え？」と聞き返す。

「榎田さんと私、同じ塾通ってるの。それでなんとなくわかるの。本読んでる途中で話しかけられたり、どうでもいい偏見聞かされたりするの、嫌いだよ」

だから、春子のこときつと嫌いだよ。

よく見てるなあ、と冷静に思った。冷静になつてしまった。できれば本人の口から聞きたかった。

「榎田さん、確かに運動部っぽくないかもしれない。でもさ、そんなの特別なことじゃないし、体が細めだからって長距離の選手って決まるわけじゃないし」

だから何、とは言えなかった。

「佐藤先生のことだつてさ、明らかにいやそうな顔してたの気づかなかつた？春子の一方的な考えなんて聞きたくないって顔してた」

気付いたら、もうあかりちゃんの家がすぐそこにあつた。ごめん、言いすぎたかも、なんて思つてもないようなことを口にしなから、あかりちゃんは家に向かつていった。

本当によく見ていたんだなあ、ともう一度思った。榎田がどれだけ私のことを嫌がつっていた

のか気付いていたのなら、なぜ、私の感情には気づかないんだろう。

私は、あかりちゃんが嫌いなのに。

あかりちゃんの、隙間のない話し方が嫌いだ。対話をせず、相手を自分色に染めてしまう話し方。その時の目が、私はあなたの悪いところを全部知っている、と言っている。

自分の悪いところなんて、言われなくても分かっている。自分がAチームになれないのも、いつも勝手なことばかり言ってしまうところも。でも、あかりちゃんにだけは言われなくなかった。きれいな容姿で、運動神経もいい。そんなの、言い返せるわけじゃないじゃないか。

榎田に言われたかった。いつも一人で自分に似ていて、あかりちゃんと真反対の子に。